

Newsletter

No. 32 March 2019

- シリーズ「日本の中の世界史」(全7冊、岩波書店、2018年～)
——刊行にあたって ——— 1頁
- 蘇る『萬國新史』 小谷汪之 ——— 5頁

発行：NPO-IF 世界史研究所 <http://www.npo-if.jp/riwh/>

シリーズ「日本の中の世界史」(全7冊、岩波書店、2018年～) 刊行にあたって

人や社会のあり方が、それらを取り巻いて生起する世界中のさまざまな出来事によって突き動かされ、方向づけられてきたこと、そしてそのような^{インパクト}に対する人や社会のさまざまな^{レスポンス}反応が、人や社会の内実を形づくってきたこと、このことは過去のどの時代についてもいえることである。しかし、それが特に目に見える形をとって現われるのは近代という時代においてである。

幕末・維新时期以降、日本の近代を生き
た人々は世界中の政治や経済や文化の動きに否応なく巻き込まれると同時に、それらの動きを取り込んで、自らの主体を形づくってきた。その過程で、「国民」と「国民国家」の形成という一九世紀世界史の基本的な動向が日本列島にも貫徹して、人々を「日本国

家」という鑄型の中にながちりとは^はめ込んでいった。それは同時に、人々が「日本国民」という意識を自らのものとして受け入れていく過程もあった。ただ、この「日本国家」、「日本国民」という枠組は、沖縄の人々やアイヌ(ウタリ)の人々、そして後には、「在日」を生きることとなる人々などに対する差別の構造を深く内包するものであった。

このようなものとしての日本の近代においては、法律や社会制度、社会運動や社会思想、学問や芸術等々、何をとっても、日本に「固有」といえるものは存在しない。それらは、いずれも、「日本の中の世界史」の現れとして存在しているのである。

それゆえに、私たちはいたるところに、「日本の中の世界史」を見出すことができるはずである。本シリーズの七名の著者たちは、二〇一四年八月以来、数カ月に一度の研究会を積み重ね、政治や経済、文化や芸術、思想や世界史認識など、それぞれの関心領域において、「日本の中の世界史」を「発見」するために、持続的な討論を行ってきた。本シリーズは、その過程で、七名の著者たちがそれぞれの方法で「発見」した「日本の中の世界史」の物語である。

今日、世界中の到る所で、^{ファースト}自国本位的な政治姿勢が極端に強まり、それが第二次世界大戦やその後の種々の悲惨な体験を通して学んださまざまな普遍的価値を否定しようとする動きにつながっている。日本では、道徳教育、日の丸・君が代、靖国といった戦

前的なものの復活・強化から、さらには日本国憲法の基本的理念の否定にまで行き着きかねない政治状況となっている。

私たちは、日本の中に「世界史」を「発見」することによって、日本におけるこのような^{ファースト}自国本位的政治姿勢が世界的な動きの一部であることを認識するとともに、それに抗する動きも、世界的関連の中で日本のうちに見出すことができると確信している。読者のかたがたに、私たちのそのような姿勢を読み取っていただければ幸いである。

2018年10月17日

池田 忍、木畑洋一、久保 亨、小谷汪之、南塚信吾、油井大三郎、吉見義明

ダイナミックに連動する「日本／世界」の近代経験

シリーズ
日本の中の世界史
全7冊

岩波書店

第1回 11月15日 発売
「連動」する世界史 —19世紀世界の
中の日本
南塚信吾 ISBN 978-4-00-028384-7 本体2400円

第2回 12月18日 発売
エンパイアレポート
帝国航路を往く —イギリス植民地と近代日本
木畑洋一 ISBN 978-4-00-028385-4 本体2400円

第3回 1月17日 発売
中島敦の朝鮮と南洋 —二つの
植民地体験
小谷汪之 ISBN 978-4-00-028386-1 本体2400円

岩波書店
定価は表示価格に消費税が加算されます。 2018.11

四六判・並製カバー
平均256頁

シリーズ「日本の中の世界史」のパフレット（表・裏）

シリーズ「日本の中の世界史」のパンフレット（中）。各冊の詳細。

「連動」する世界史

— 19世紀世界の中の日本 —

南塚信吾

明治国家はどのようにして作られたのか。「世界史の傾向」が諸地域間の関係と連動との中で、日本に土着化してゆく歴史として描き出す。

- プロローグ……「連動する世界史」
- I 変革の時代—世界史の中の幕末・維新
- II 「国民国家」の時代—世界史の中の明治国家
- III 帝国主義の時代—世界史の中の日清・日露戦争
- エピローグ……「土着化する世界史」

帝国航路を往く

— イギリス植民地と近代日本 —

木畑洋一

イギリスの「帝国航路」をたどって渡欧した旅行者たちの経験や思索を通して、帝国主義世界体制の中での位置を模索する近代日本の姿に迫る。

- プロローグ……「西洋道中膝栗毛」と帝国航路
- I 帝国航路とイギリス植民地
- II 幕末動乱のなかで—一八六〇年代
- III 明治国家建設をめざして—一八七〇～一八〇年代
- IV 帝国支配圏へ—一八九〇年代～第一次世界大戦
- V ヨーロッパへの挑戦—一九二〇～三〇年代
- エピローグ……「帝国航路とアジア・ヨーロッパ」

中島敦の朝鮮と南洋

— 二つの植民地体験 —

小谷注之

作家・中島敦は、朝鮮と南洋の二つの植民地での見聞を通じて何を感し、考えたのか。日本人の植民地体験を追体験し、その意味を問い直す。

- プロローグ……中島敦・ステイヴンソン・植民地体験
- I 中島敦の朝鮮—一九二二～三四年
- II 南洋庁編修書記、中島敦—一九四一～四二年
- III 「光と風と夢」—サモアのステイヴンソンと中島敦
- IV 南洋に生きた人々
- V 中島敦の南洋
- エピローグ……植民地体験の反響と追体験

日本で生まれた中国国歌

— 「義勇軍行進曲」の時代 —

久保亨

国民党幹部・邵元冲、その妻張黙君、中国国歌の作曲者・聶耳。三人の眼に映じた二〇世紀前半の日本の姿を通して、日中関係の原点を問い直す。

- プロローグ……世界に目を開く中国
- I 日本に做った近代化—一九一〇年代初め
- II 日本モデルとの決別—一九二〇年代後半～三〇年代前半
- III 対等な対日関係の模索—一九三〇年代末
- IV 侵略する日本と抵抗する中国—一九三〇年代
- エピローグ……二世紀の日中関係へのメッセージ

手仕事の帝国日本

— 民芸・手芸・農民美術の時代 —

池田忍

西洋との出会いを通じて生成し制度化する「日本美術」。民芸や手芸に新たな価値と意味が見出される過程と、そこに内包される矛盾・葛藤を問う。

- プロローグ……帝国を生きたこと、手仕事を遊ぶこと
- I 「日本美術」の生成と西洋近代
- II 民芸の射程—富本憲吉の家と帝国
- III 工芸、手芸とアマチュアリズム—藤井達吉と女性たち
- IV 農民美術運動と農村政策の時代—山本鼎の実践と藤井
- V 手仕事と帝国を描く—岡田三郎助の女性像を起点に
- エピローグ……手仕事の日本はどこから来たのか、そしてどこへ行くのか

平和を我らに

— 越境するベトナム反戦の声 —

Give Peace a Chance

油井大三郎

世界史上、ベトナム反戦運動ほど国際連帯が進んだ運動はなかった。半世紀前の経験を通じて「民衆のグローバルレシジョン」の可能性を考える。

- プロローグ……今、なぜベトナム反戦運動を振り返るのか
- I ベトナム独立運動との邂逅
- II ジュネーブ協定と戦後世界の平和運動
- III 戦争の「米国化」と反戦運動の始まり
- IV 反戦運動の高揚と和平交渉の始まり
- エピローグ……ベトナム反戦運動の遺産

買春する帝国

— 日本軍「慰安婦」問題の基底 —

かいしんめい

吉見義明

人身売買によつて支えられていた近代日本の公娼制。日本軍「慰安婦」制度へとつながるその変容の歴史を世界史の潮流の中に位置づける。

- プロローグ……性的享楽を組織化する帝国の力
- I 人身売買禁止から公娼制へ—一八七二～一八九四年
- II 公娼制と買春帝国—一八九五～一九一八年
- III 第一次世界大戦後の買春帝国の変容—一九一九～一九三七年
- IV アジア太平洋戦争と買春帝国の再変容—一九三七～一九四五年
- V 公娼制廃止から売春防止法へ—一九四五～一九五六年
- エピローグ……男の性的享楽から男女の人権確立へ

シリーズ「日本の中の世界史」は、2018年11月に南塚信吾『「連動」する世界史——19世紀世界の中の日本』がまず刊行されました。それを皮切りに、同年12月に木畑洋一^{エンバイアルト}『帝国航路を往く——イギリス植民地と近代日本』、2019年に入り、1月に小谷汪之『中島敦の朝鮮と南洋——二つの植民地体験』、2月に久保亨『日本で生まれた中国国歌——「義勇軍行進曲」の時代』と、全7冊中4冊が刊行されています。

これらの刊行を受け、新聞紙上では書評や紹介記事が登場しています。『朝日新聞』では毎週土曜の読書欄において、南塚信吾『「連動」する世界史』の書評が掲載されました（『朝日新聞』2019年1月19日、25頁、評者：出口治明）。ここでは、「明治維新は、欧米での「革命」の諸過程、つまり19世紀の世界史の「傾向」が「土着化」したものであり、日本の近代化においては、法律や社会制度など何をとっても日本「固有」のものではなく、それら全ては「日本の中の世界史」の現れとして存在している」という本書の論点が端的に紹介されながら、そうした「面白い試み」の「続巻」に期待が寄せられています。

一方、『読売新聞』では、『「連動」する世界史』の著者で本研究所所長南塚へのインタビュー

とともに、本シリーズが文化欄のなかで紹介されました（『読売新聞』2019年1月21日、29頁）。「グローバル化もあってか、世界史への関心は2000年代以降、地球規模で高まっているという。それでも、ヨーロッパ中心あるいは一国主義的な歴史の見方は、なかなか変わらない。さらに日本の歴史学では、学問的成果をあげるため、対象の地域やテーマを細分化・精緻化させる一方だと指摘。「我々の現実の生活から逃げている歴史学に、社会的な意味があるのか」と疑問を呈す」。ここでは、南塚の直接の言葉を通して、世界史を取りまく学術的な状況が述べられつつ、本シリーズの意義が示唆されています。

また、第二冊の木畑^{エンバイアルト}『帝国航路を往く』についても、『毎日新聞』の毎週日曜の「今週の本棚」において、書評が掲載されています（『毎日新聞』2019年2月24日、評者：加藤陽子）。以上、詳細については、各紙面をご参照ください。

シリーズの完結まで残るは3冊。池田忍『手仕事の帝国日本——民芸・手芸・農民美術の時代』、油井大三郎『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』、吉見義明『買春する帝国——日本軍「慰安婦」問題の基底』が予定されています。

『朝日新聞』の書評



月21日(月曜日) 文化 南塚信吾

日本史と世界史 相互乗り入れ

7冊シリーズ「日本の中の世界史」刊行開始

南塚信吾 千葉大名誉教授に聞く

「日本の歴史は日本の中の歴史には過ぎない」といふことを知らなくてもいいから、と語る南塚氏

タイトル	著者	内容
「交戦」する世界史	南塚信吾	明治国家の成立を、世界史の「論争」の中で見ていく
南洲航路を往く	木村正	南洲航路、をたどった南行の諸島から、世界での位置を考察する
中絶の朝鮮と南洋	小谷汪之	日清戦争後、朝鮮と南洋で何を成し、何を失ったのか。日本人の植民地政策を論じる
日本で生まれた中国国歌	久保亨	中国国歌の作詞者の目線から、中国国歌の歴史を論じる
手仕事を誇る日本	堀田重	明治時代の日本を、手仕事を軸に考察する
平和を我らに	堀田重	日清戦争後、日本が平和を我らに何を求めたのか
買春する帝國	吉沢潤	日清戦争後、日本が買春を我らに何を求めたのか

『読売新聞』の紹介記事

日経新聞

帝国航路を往く

南洲航路を往く

南洲航路、をたどった南行の諸島から、世界での位置を考察する

「日本の歴史は日本の中の歴史には過ぎない」といふことを知らなくてもいいから、と語る南塚氏

南塚信吾 千葉大名誉教授に聞く

「日本の歴史は日本の中の歴史には過ぎない」といふことを知らなくてもいいから、と語る南塚氏

南塚信吾 千葉大名誉教授に聞く

「日本の歴史は日本の中の歴史には過ぎない」といふことを知らなくてもいいから、と語る南塚氏

『毎日新聞』の書評

蘇る『萬國新史』

小谷汪之

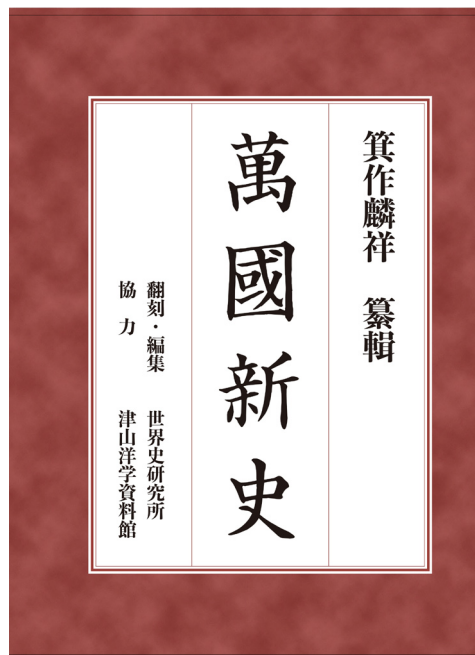
箕作麟祥『萬國新史』が世界史研究所(南塚信吾所長)から翻刻、刊行された。箕作麟祥(1846〔弘化3〕-1897〔明治30〕)は、ボアソナードらとともに、民法典の起草に当たったことで知られる(この民法は公布されながら施行されなかった)。『萬國新史』は1871年から77年にかけて和綴本18冊の分冊で刊行されたが、世界史研究所の翻刻本はB5判縦2段組425頁1冊にまとめられている。時代的には、フランス革命から普仏戦争後まで、地理的には、東南アジアとサブサハラ・アフリカを除く世界全体をカバーしている。

『萬國新史』は、西欧列強の争奪戦を軸としながらも、その中でさまざまな現地勢力が独自の動きをしたことを重視している。ポーランド分割反対闘争の指導者コシチューシコや、エジプトをオスマン帝国から独立させ、「近代化」を追求したムハンマド・アリーに対する関心は、幕末維新期の対外的危機の克服と「近代化」を喫緊の課題とした明治知識人ならではの関心である。それはさらに、北カフカースでロシアによる侵襲に抵抗したシャーミルや英露対立の中でアフガニスタンの独立を保ったドースト・ムハンマドなどへの関心に

つながっている。

『萬國新史』は同時代全体史として、今なお方法的に有意義であるが、歴史研究の精緻化と細分化が進んだ現在、それ以外にも多様な世界認識の方法が模索されている。岩波書店から刊行され始めたシリーズ「日本の中の世界史」（全7巻）はそのような模索の一例といえるであろう。

（『図書』（岩波書店）、2018年11月号より再掲）



翻刻版『萬國新史』の表紙

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2019年03月20日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-17-3 渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216 fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp URL: <http://www.npo-if.jp/riwh/>

スタッフ

所長
顧問

研究員

南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
下村 由一（千葉大学名誉教授）
百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
木村 英明（早稲田大学講師）
木村 真（日本女子大学講師）
鈴木 健太（東京外国語大学特別研究員）
山崎 信一（東京大学講師）
姉川 雄大（千葉大学特任助教）
崎山 直樹（千葉大学特任講師）
鹿住 大助（島根大学講師）
稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
近藤 正憲（学術博士）

特別研究員

